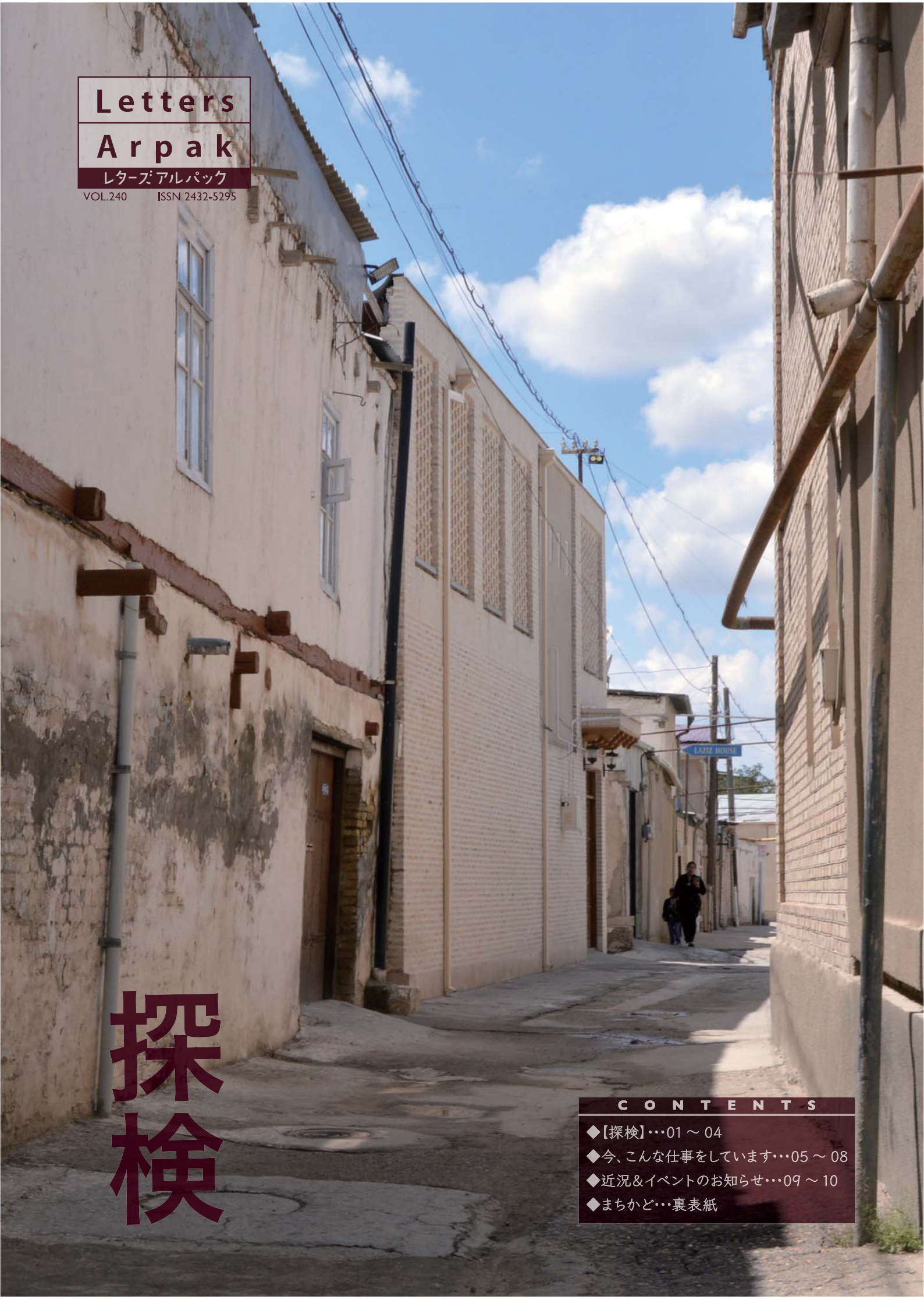
Letters
Arpak
レターズ・アルパック
VOL.240 ISSN 2432-5295



探検

CONTENTS

◆【探検】…01 ～ 04
◆今、こんな仕事をしています…05 ～ 08
◆近況＆イベントのお知らせ…09 ～ 10
◆まちかど…裏表紙

探検

大英帝国の旅行家であるイザベラ・バードは、1878年の日本滞在中の東京から北海道までの旅行記を『日本奥地紀行』（Unbeaten Tracks in Japan）として取りまとめました。大政奉還から11年、近代国家として歩み始めたばかりの日本の様子を記した貴重な記録です。

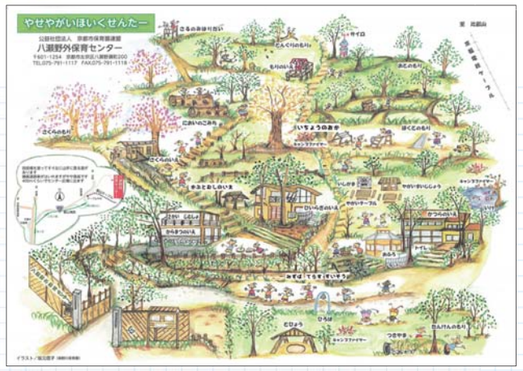
ヨーロッパ諸国にとって当時の日本は「未知」の世界であったことでしょう。日本の風俗を好奇の目で紹介しています。彼女にとっても日本、特に東北や北海道への旅行は「探検」だったかもしれません。

現代の日本では、さすがにどこのまちに行っても「探検」感を味わうことは難しいかもしれません。しかし「この路地の奥には何があるのだろう」「この川はどこから流れて来るのだろう」など、小さな「未知」を見つけ、好奇の気持ちを持ってまちと接していきたいものです。

レターズアルパック編集委員会

未来を拓く！

三輪泰司：
名誉会長



保育士の描いた八瀬野外保育センター

ご承知のように、アルパックの根幹である「環境」部門創設は、1972年9月です。千里中央での大阪事務所開設の時です。世間から見ると早すぎたかも知れません。えいえいと、家庭ごみ質調査を重ね、産業廃棄物へ、脱炭素へ、気候変動対策へ、そして「地球環境との共生」へ歩むのです。

人新世の時代　世間が追いついてきた

2000年という年は、年初から中國・大連で初めての国際都市づくりコンペに参加したりして、忙しい年でした。その2月、地球圏・生物圏国際協同研究計画（IGBP）のクエルナバカ会議で、地質年代「人新世」が、初めて国際会議で議論されたのです。その年代が何時か、まだ議論の最中ですが、どちらにしても、今やこの地球には、「人跡未踏」のフロンティアはなくなってゆくのです。

子どもの「作品」を観る信ヶ原千恵子センセイ

新時代の探検　命つなぐフロンティア

開拓とか探検は、すべてなくなったのでしょうか。宇宙開発は？地球圏の延長ではないですか？身近にありました。コドモです。イノチです。幼児施設はコミュニティのセンターを担っています。

1976年、アルパック創業の年から、えいえいとミゾを掘り、タンポポを植え、奉仕してきました。京都から、奈良、神戸、名古屋へ、どんな小さなご相談もお断りしないと、施設設計まで携わったのは100ケ園にもなるでしょう。総務担当者まで加わり「子ども目線」で竣工検査をしました。

保育施設でのボランティア活動や、プロのカメラマンを頼んで「ごみ図鑑」なんて作ったり、総務担当者を動員するには、事務所長或いは社長の裁量とか決裁が要ります。下から上へ、上から下へ、タテヨコ、ナナメのコミュニケーションこそが、未来を拓くカギでしょう。

まちを知り、まちに近づく
- 京橋界隈の探検 -

新開夏織：
建築プランニング・デザイングループ

大川沿いの公園

大阪の京橋は、JR・京阪・地下鉄の駅が集積する、大変交通の便が良いまちです。一方で、大阪有数の歓楽街の一つでもあり、私は初めて来た時から少し〝怖い場所〟という印象を持っていました。

しかし、ひょんなことから京橋に引っ越すことになりました。住んでみると、生活するには便利なのですが、駅前では毎日何かしら行われているし、商店街の入り口には不思議なモニュメントがあるし、しばらくは馴染めないでいました。そんな中、時々まちを探検していると、色々なことがわかってきました。

①京橋は大阪と京都を結ぶ街道として、昔から交通の要所であった

駅から北東に続く新京橋商店街にはかつて京街道が通っており、商店街の中にある石碑には、豊臣秀吉の時代を起源とするまちの歴史がつづられています。

②少し足をのばせば、休日も楽しめるスポットがたくさん

自転車さえあれば、大川沿いや大阪城など自然いっぱいの公園や美術館など、有意義な休日を過ごせる場所に行くことができます。

京街道の石碑

③懐かしさと新しさが混在した駅回り

駅回りには様々な年代を感じるものが混在しており、地元の方のお話では、「かつて京橋には工場や立ち飲み屋が多く、暗くて若い人が来るようなまちではなかった。今ではそれらは建て替わり、高架下にもおしゃれなお店が増え、随分まちの雰囲気が変わったよ」とのこと。それを聞き、駅から少し離れた高架下まで行ってみると、人気の少ない静かな場所にたどり着き、昔はこんな感じだったのかなと想像しました。

このように、まちの事を調べたり、お話を聞いたり、探検たりしながら少しずつまちの事を知っていくと、最初は馴染めなかったものたちも、このまちのユーモアに感じてきて、少しまちに近づけたように思います。また時々探検して、京橋の良いところを発見していきたいです。

ウズベキ探検

筈谷友紀子：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

旧ユダヤ人邸宅

サマルカンドの住宅地のまちなみ

「乙嫁語り」という漫画を知っていますか。18～19世紀の中央アジアのお嫁さんについて描いた物語です。イギリスからの探検家スミスが中央アジアの暮らしを記録・研究するためある一家を訪れ、そこでの暮らしが温かに描かれています。

この物語をきっかけに、私も中央アジアを目指してウズベキスタンへ探検に行ってきました。ウズベキスタンは旧ソ連にあたり、ウズベク人、タジク人、ロシア人などによる多民族国家です。

未知なる場所の探検には危険がつきもので、まずウズベキスタンではほとんど英語が通じませんし、列車は定刻には来ず、早く着いたら早く出発します。街や人々の熱気、しぶとさが特徴的で、こちらも気を張らないとやってられません。寝台列車で7時間ほど移動した際には相席した現地人グループにずっと話しかけられたり、断っているのに案内してやるよと言われ一日車でガイドされたりと、現地の人の好奇心にやられてしまいます。人々の熱気やしぶとさを最大限に感じられる場がバザール（市場）です。その規模、活気はけた違いで、あるバザールでは「人間以外何でも売っている」と言われているほどです。

未知なるウズベキスタンの伝統的なまちなみは、質素ながら手の凝った玄関のファサード、中庭を平屋が囲っており（カスバ・ホートン型）、中庭には畑と家畜小屋があります。

一方、ユダヤ人居住区では平屋が2階建てに代わり、敷地も大きくなります。道はほとんど未舗装ですが、ウズベキスタンの『お嫁さん』が早朝にお掃除します。ウズベキスタンは「家族」の結びつきが非常に強く、お嫁さんの仕事は人一倍あり、ナンパは「家族」の写真を見せるところから始まります。

異文化探検を通じて風土や文化に規定された自らの気質に気づきます。ウズベキスタンの風土で暮らすと性格ががらりと変わるんじゃないかと思うほどの熱気とバイタリティーがまちに溢れています。

農産物直売所をめぐる

武藤健司：
地域産業イノベーショングループ

農村地域を訪ねる機会が多い私は、時間が許せば農産物直売所に立ち寄り、その地域の農業を知るヒントにしています。

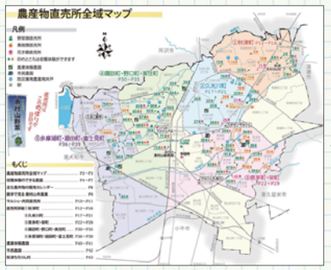
きっかけは10年程前の徳島県の業務でした。県内直売所の魅力アップを図るため、状況調査などで大小さまざまな直売所をまわりました。出荷ルールをはじめ、売り方やイベントの工夫、地域資源との連携方法など、多くの学びがありました。

直売所の魅力は、やはり、「旬の、いまここにしかないもの」に出会えることだと思います。季節はもちろん、朝と夕方では並んでいるものも違います。規格が統一されているスーパーとは違って、1つとして同じでない農産物が並んでいます。1つ1つの棚を見ながら、掘り出しものを見つけることは、まさに「探検」です。

はじめに、店内の入口に注目します。入口の売場は、「直売所の第一印象が決まる場所」とも言われています。いまの旬や、季節の果物がこれでもかと並べられていると期待が高まります。そんな直売所のイチオシを押さえつつ、いまここにしかない1品を探し、店内をまわります。

具体的には、見慣れない、めずらしい野菜（品種）を探します。その地域で大事に守られてきた伝統野菜はもちろん、変わり種のなす、スティックセニョール（茎ブロッコリー）、トマトでいえばプチぷよ（さくらんぼのような食感）なんてあると思わず買ってしまいます。他にも、レシピ紹介など工夫したり頑張っている生産者の野菜を買ってみたり、加工品であれば、6次化商品をはじめ、漬物や発酵食品など、ご当地ならではの食文化に触れることも楽しみの1つです。

直売所は店舗型だけではありません。3年前に農業振興計画の策定で関わった東京都東村山市では、生産者の庭先や畑の一角に設置された「庭先直売所」が100か所以上あります。市民のニーズも高く、計画では重点プロジェクトとして位置づけ、庭先直売所のブラッシュアップを図っています。畑で買えることが魅力であり、庭先直売所（と都市農地）をめぐることもオススメです。



東村山市農産物直売所めぐりマップ

みんなに見て欲しい あわじしまを詰め込んだ旅

太田雅己：
生活デザイングループ

淡路島では近年、オシャレなカフェ・レストランがたくさんできています。それも楽しくていいんだけれど、見て欲しい場所や風景は他にもたくさんあるんだよという話。

大学時代のゼミの恩師やOB・OGで集まり、私の地元の淡路島へ1泊2日であそびに行きました。探検でも研究でもなくただの旅行ですが、「みんながあまり知らないけれど、実は見て欲しい淡路島」をテーマに企画しました。

三ノ宮でレンタカーを借り、明石海峡大橋を渡って淡路市へ。まずは近年一気に開発が進んでいる飲食店や観光施設などを見て回りました。楽しいスポットがたくさんできて、観光客や雇用が増えることは良いものの、それらの開発がもたらす景観面や交通などの観光公害的な影響の良し悪しについて、答えはないですがみんなで少し考えました。

その後は洲本市の市街地で、空き家を活用したゲストハウスに宿泊。夜は地元の銭湯で、がっつり刺青の入った常連のお兄さん達との談笑を楽しみました。

他にも漁師のまち由良にある無人島「成ヶ島」や、淡路土を使った土壁メーカーの施設「土のミュージアム」など、淡路島の素材や自然景観の魅力を見てきました。

島外資本による近年のおしゃれスポットと、昔からある地元のプレイヤーのお店などを対比的に見ながら、批判的な目線でいろいろと考える機会にもなりました。また、就職して数年経った同窓生との意見交換は、それぞれ違う視点を持っていて楽しいものでした。

他にもおすすめスポットはたくさん紹介できますので、淡路島に遊びに行くときはお声がけください！

新しくできた施設を見ながらあれこれと話している様子

地元の銭湯「東光湯」

徳島県上勝町と神山町に行ってきました

齋藤友宣：
地域再生グループ

探検というほどではないのですが、先日、所属する地域再生グループで研修旅行に出かけました。

行き先は、私自身も前々から一度行ってみたかった徳島県の上勝町と神山町です。2つの町は隣同士で、上勝町は料理のつまものの生産・販売を行う「葉っぱビジネス」と循環型社会を目指した「ゼロウェイスト宣言」、神山町はITベンチャーや起業家が盛んに移転・移住してくる地域再生の町として名を馳せています。

2つの町の各取組は、既に書籍やインターネット記事などで多数紹介されており、ここでは詳細な紹介は省きますが、いずれも町の外との関りを大切にし、外の力を取り込みながら取組を進めている点が印象的でした。

それでは、探検（視察）の様子を写真で紹介したいと思います！

▲念願の「上勝町ゼロ・ウェイストセンター」で説明を聞く面々

▼お昼を食べたカフェの葉っぱ箸置き

▲町民の方々が実際に分別排出する分別場の様子

▲まだ使えるものは捨てずにリユース。リユースショップもおしゃれでした

▲神山町内カフェの地産地消ランチ
毎月独自の地産地消率を公表

▲神山町に自社のサテライトオフィスを設置、移住者でもある経営者 隅田徹氏にお話を伺いました

ゼロ・ウェイストセンターに併設された「HOTEL WHY」にてせっけんは必要分を考えて宿泊者自身がカット

▲神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス

探検と植民地主義

宮英理子：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

ギュスターブ・エッフェルによるアーティスト・レジデンス、「ラ・リーシュ」を再現した建築

最近観た、アメリカの同化政策をテーマとした映画の中で、黒人のキャラクターが「探検するのは白人と決まってる」と言い放つシーンがありました。探検とはある意味で特権的な行為なのかもしれません。

先日、山梨県北杜市の「清春芸術村」を見学しました。山奥の住宅地に突如、安藤忠雄や藤森照信などの名建築が立ち並ぶ敷地が現れます。1980年、画商の吉井長三が、親交があった白樺派が夢見ていた美術館を実現させたことから始まりました。芸術家の創作、交流の場として、八ヶ岳など山々に囲まれ、春には桜が咲くこの場所を選んだそうです。

近年、白樺派の民藝運動が注目を集めています。民藝運動とは、日本各地の日常の生活道具を民藝として蒐集し、生活の中に美を見出す運動です。当時、上流階級が専有していた芸術を民衆に開き、ヒエラルキーの解体を図ったとする一方で、民衆への非対称的な視点、アイヌや中国の王侯貴族の美術品をも民藝とみなすなど、その観点が植民地主義的であるという批判もあります。芸術村も、自然に囲まれた土地と名建築にほれぼれする一方、そこだけまちから浮いているような、民藝運動と共振するものを覚えました。

同じく北杜市に位置する清里は、1970年代半ば頃に人気を博し、タレントショップやメルヘンな建物が立ち並び、「高原の原宿」と呼ばれていました。現在、駅前にはメルヘンな建物だけが残っているようです。

清里は、1938年、奥多摩の小河内ダム建設のために立ち退きを強いられた人によって開拓され、関東大震災の支援のため来日したポール・ラッシュ氏が、標高が高く米作に適さない清里高原での農業を指導し、開拓を支援しました。これらの開拓は観光地の地盤をつくりました。清里は様々な外部からの開拓、開発の歴史を有しています。

今回、北杜市の芸術村を訪問し、清里の歴史を知ることで、探検し、発見し、開拓するという行為は、その土地に経済的基盤や文化をもたらす一方、植民地主義的な側面を免れ得ないと感じました。今後も、負債を残さないまちづくりの在り方を考えていきたいです。

企業に農業と農村を守る力を貸してほしい！
合言葉は「人材の農村回帰の大潮流を、明日香から」

廣部出：
公共マネジメントグループ

高度成長期に人的資源が三大都市圏に集中したことではじまった農村の衰退は、いまや中山間地などの存亡の危機に至っています。

食料自給率はこの60年で79パーセントから37パーセントと半分以下に下落。農業・農村には、治水・大気調節・生物多様性の保全など多面的な機能があるため、その荒廃は大問題です。

そんなことですから、これからの農村の持続的発展とか安全・安心な食料自給とか国土の安全とかをなんとかしようとすると、高度成長期をけん引した企業が人材を供給するしかないのです。

『日本の原風景を守る明日香村』は立ち上がります。企業に対して3つの役割を期待。①従業員が「農に親しむ」「農貢献する」機会をつくる役割 ②従業員の、農業と地縁活動に関するスキルとノウハウの習得をサポートする役割 ③人材を農村（集落や保全・活用すべき農地）とつなぐ役割です。その前提には、そもそも企業活動自体を通じて農業と農村を守ってほしいまであります。

そして、持続可能な企業はニッポンの農村をなんとかする。これを合言葉として、明日香村は企業の農貢献が企業価値の向上につながることを高らかに示しつつ、5つの農貢献プログラムを提供して人材の農村回帰の大潮流をリードするのです。

ここではそのうち1つしか挙げませんが、まずもって「稲渕棚田で稲作」です。「日本の棚田百選」にも名を連ねる稲渕棚田をフィールドとして、「日本の原風景を一緒に守ろう」「全国どこでも稲作できる力を身につけよう」を合言葉に通年で稲作してもらうものです。今回、合言葉は多めです。あとは「あすかオーナー制度」と「企業版ふるさと納税」「あすか農産物等の購入」「農業支援ボランティア」です。うっかり全部書きりましたが、ご関心をお持ちになった社長・総務部長・人事部長様各位、明日香村役場まで、ぜひご連絡を。

明日香村役場 観光農林推進課
（TEL 0744-54-9020）

日本の原風景をつくる、稲渕棚田（明日香村ご提供）

自然のちからを活かした地域づくりへ
グリーンインフラの市民・事業者向け パンフレット（案）を作成しました

石川聡史
都市・地域プランニンググループ

「グリーンインフラ」とは、自然環境が有する多様な機能を社会基盤整備の中で活用していこうとする考え方を示す言葉です。

例えば、水害を防ぐ遊水地、暴風を弱める防災林、ヒートアイランド化を防ぐ屋上緑化などはグリーンインフラの一要素と言えます。

かつては人口増加や経済の拡大に伴い、緑を増やすことや守ることが重視されてきましたが、持続可能な社会を目指す方向に転換する中で、緑が持つ多様な機能に着目し、それをいかに活用していくかを重視する方向へシフトしつつあります。近年は災害の激甚化や地域環境問題の深刻化、地域コミュニティ機能の低下などへの解決策としてグリーンインフラへの期待が高まりつつあります。

■市民とともに取り組む緑のまちづくりに向けて

名古屋市では、これまでもグリーンインフラの取組を進めていますが、なお一層の取り組みの推進に向けて広報用のパンフレットを作成することになりました。

パンフレット（案）では、グリーンインフラを身近なものと感じてもらえるようイラストや写真を多用しながら自然が持つ多様なはたらきを例示するとともに、これまで市内で取り組んで来た事例や市民、事業者向けの取り組みを紹介する内容を盛り込みました。

グリーンインフラは、その地域の地形や地質、気候などの条件に対応して多機能性を根差したものとしていくことが求められますし、その機能を継続させるためには維持管理も重要です。また、緑の連続性を考えると公共用地だけでなく民地でも取り組んでいくことが望まれます。

地域の特性に応じたグリーンインフラの実現に向けては、いかに多様な主体が関わりながら進めていくかがポイントの一つになるのではないかと考えます。その意味で今回作成したパンフレット（案）がグリーンインフラの普及に向けた一助になれば幸いです。

ヤエックス株式会社　新社屋が完成しました

間瀬高歩・塗師木伸介：
建築プランニング・デザイングループ

ヤエックス株式会社（以下、「ヤエックス」）は愛知県清須市西枇杷島町に所在し、主に全国の水族館や動物園をはじめ、プロスポーツ、テレビ局、アミューズメントパーク、スキー場、博物館、官庁、大学などへのグッズの企画製造卸の事業を展開されています。

取引先は日本全国におよび、北海道から九州まで、社内デザイナーにより本社工場・協力工場においてものづくりを行い、文具・雑貨・玩具・アパレル・菓子など多種多様なニーズに対応されています。

ヤエックスは、昭和42年に名古屋市東区において肌着類の問屋として弥栄メリヤス株式会社を創業され、昭和45年に現在地の清須市へ移転し、全国区の問屋へ販売網を拡大されました。順調に事業展開される中、平成12年の東海豪雨においてヤエックス近傍の新川が破堤し、社屋は床上浸水により甚大な被害に遭われました。

社屋の老朽化のため、令和元年12月にはヤエックス加納宏会長とアルパック杉原相談役の小学・中学校からの同窓のご縁により、当社がヤエックス新社屋（以下、「新社屋」）の計画・設計・監理を担当させていただくこととなりました。コロナ禍のため、実施設計に入る段において令和2年4月から新社屋設計は1年半の中断となりましたが、加納宏会長・加納丈嘉社長の決断により令和3年12月設計を再開、令和4年9月旧社屋を解体、同年11月新社屋を着工、令和5年6月に新社屋が完成しました。

■新社屋の基本的な考え方

新社屋設計では、ヤエックスの企業理念『ナンバーワンよりオンリーワン企業に』、『規模を追い求めず、差別性のあるオンリーワンの会社』、『人々の思い出に残るような商品を提供する会社』をふまえ、新社屋のコンセプトを検討しました。

オンリーワンの社内環境を創出するための基本的な考え方として、デザイナーが創造的な作業に取り組めること、風通しがよく相互に意見が出しやすい環境であること、社員の顔が見えコミュニケーションがとりやすい環境であることを重視しました。

新社屋は、災害に強い建築であることを基本とし、社員が主体的に創造でき、かつ相互に議論し、厳選された商品を世に送り出す情報発信の拠点とすること、社員の顔が見える一体的な執務空間、集中して考えたいときの個室空間を複合化することを設計方針としました。

■新社屋の設計

敷地は第一種住居地域に位置し、戸建て住宅に囲まれた環境、周辺は工業地域や近隣商業地域が広がり、低層・中小規模建物が多い住工混在の土地利用となっています。

周辺環境との調和と存在感のある新社屋を意図し、地下1階・地上2階建て、切妻屋根（妻入り）、棟高10．8メートルの鉄骨造建築、東海豪雨による浸水被害の経験をふまえ1階の床高さは地盤面から1.2メートルの高床式構造を設計しました。

1階には商談ギャラリー、ミーティングルーム、プリンター室等を計画し、2階にはデザイナー、営業、出荷、総務の執務スペース、オンラインにも利用できるブースを計画しました。オンライン会議のニーズをふまえ、大きな会議室を設けるのではなく、複数のコンパクトなミーティングルームやブースを設けることを重視しました。

2階執務スペースは社内の一体感があり、コミュニケーションがとりやすいオフィス空間を実現するため、鉄骨造の特性を活かし18メートル×11メートルの長大な無柱空間の構造計画としました。2階の天井は切妻屋根の形状を室内に表し、ひとつ屋根の下での開放的なオフィス空間、北側天井にはトップライトを7箇所設け、自然光が降り注ぐ空間を設計しました。

新社屋の外壁はモノトーン、内装はモノトーンと木目を活かし落ち着きのある色調としました。色調をモノトーンや木目で構成することにより、社内のアクティビティやデザインされたオリジナルグッズが映えるよう配慮しています。

ヤエックス新社屋の外観

■構想から完成までの10年

新社屋建設に至る以前の平成26年には新社屋の向かいに立地するヤエックス配送センターの耐震・内装改修工事の設計・監理を担当させていただきました。当時から新社屋建設の構想は加納宏会長からお聴きしており、10年近くの歳月を経て、新社屋完成に至りました。平成12年以降は東海豪雨、リーマンショック、コロナ禍など様々な困難がありました。このような困難な状況の中、配送センター耐震改修や新社屋建設の設計監理を担当させていただきましたご縁に感謝いたします。

ヤエックスの将来の益々のご発展を心からお祈りいたします。

ニュータウンの戸建住宅の未来

竹内和巳：
生活デザイングループ

ニュータウンの戸建住宅って少子高齢化の象徴だと思われていますが…

全国各地のニュータウンでは、急激な少子高齢化が課題として挙げられており、賃貸住宅に比べて人口の入れ替わりが起こりにくい戸建住宅はそのやり玉にあがりやすい存在と言えるでしょう。

生活デザイングループでは、今年度、洛西ニュータウン（京都市西京区）の既存住宅の流通を促進するための方策を考える業務を受託しています。

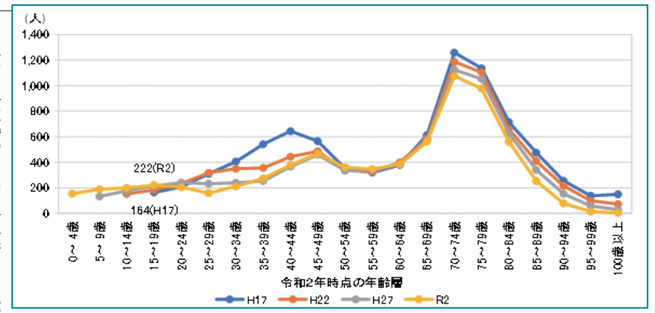
業務をはじめるにあたって、「実際人口ってどんな感じなの？」ということをはっきりさせるため、洛西ニュータウン内で戸建住宅（テラスハウス含む）のみで構成されている街区を抽出して人口等の推移を確認したところ、意外なデータが出ました。グラフは5年毎の統計調査で変化する同世代の分布を重ね合わせたものです。

もちろん、全体的に人口は減少しているのですが、近年は住宅購入する30～40代は概ね下げ止まり、19歳以下の人口はむしろ増えているのです。

ニュータウンはまちびらき当初の「子育て世帯でいっぱい」がみんなの頭にあるので、「最近は子どもが少ない…」となりがちですが、ニュータウンでも第1世代からの入れ替わりが徐々に発生しているのです。

一方で、高齢世帯も多く残っていることも事実です。あと10年ほどで、住宅が大量に供給される時期が来ると想定されます。世帯数も減少する（空き家がもっと増える）社会に突入する中では、むやみに住宅総数を増やさないまちづくりのあり方が求められます。

既存住宅を含めて、多様な住宅の選択肢を住宅取得層に示す方法を年度の後半に向けて考えていきたいと思います。



戸建住宅地の年代別人口構成の変化

いばまちサミット～楽しい、住みたい、私のまちでもやってみたい～開催報告

水野巧基：
公共マネジメントグループ

茨木市では、昨年度に地域活動の更なる活性化をめざして3つの事業に取り組みました。

①地域課題解決に取り組む地域組織の活動事例集「住みたい・住み続けたいまちづくり大百科」の作成、②地域活動の活性化に向けたワークショップの実施、③「次なる茨木まちづくりアイデア検討会議」を実施しました。

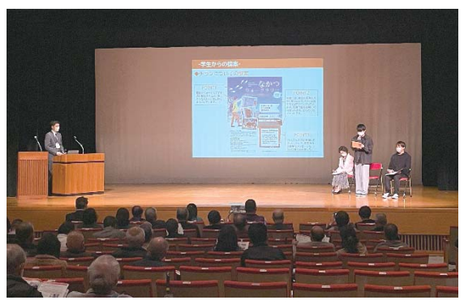
これらの事業は、地域組織の持続可能な運営に向けて取り組んでいるもので、昨年度の成果を活動の担い手の方に向けて、学生や地域の方に報告を行い、情報を共有する「いばまちサミット」を令和5年3月23日に開催しました。当社は、報告会の開催及び①～③全ての業務を支援しました。

①は、令和3年度から実施しており、今年度は新たにメンバーを募集し茨木市内に通う大学生が参加しました。学生が地域への取材を行い事例集の作成に取り組んだ内容について報告を行いました。

②は、4つの校区で地域課題の洗い出し・共有を行い、その解決方策を検討するためのワークショップを実施しました。各校区の代表者の方が検討状況について報告しました。

③は、昨年度の①の活動や報告会で地域の方から「学生と一緒に活動したい」といった声や、参加学生から「次は地域の方と一緒に活動したい」といった声を受けて、今後の他地域への展開も見据えてモデル事業として実施したものです（詳細は、前回のレターズ）。活動内容について、地域と学生から報告しました。

今回で2回目となった報告会ですが、昨年度の報告会で聞いた事例や活動を参考に、「自分たちの地域でも展開している」といった嬉しい声や、「来年度は学生と一緒に活動してみたい」といった声を頂戴しました。それぞれの事業で、新たな地域活動の実施や今後の方向性の検討が進んでおり、報告会を開催して情報共有を行うことで、また他地域での新たな試みにつながっていることを実感しました。


学生と地域による報告の様子

葛飾区柴又の「川甚」跡地活用のお手伝いをしています

石川俊博：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

葛飾区では、閉店した老舗料理店「川甚」の跡地を取得し、観光や文化発信の拠点として生まれ変わらせる取り組みを進めています。

私たちは川甚跡地活用の一環として、区役所の方々や柴又観光まちづくり検討会の皆さんの意見をお聞きしながら事業計画を具体化するお手伝いをしています。

川甚は江戸後期の寛政年間に創業した、海鮮をはじめとした季節の食材と鰻・鯉といった川魚を中心に扱う料理店でした。寅さんが登場する「男はつらいよ」の舞台となり、夏目漱石や尾崎士郎、谷崎潤一郎といった文豪たちの作品にも登場する歴史あるお店です。周辺には柴又帝釈天、寅さん記念館、山田洋次ミュージアム、登録有形文化財の山本亭といった文化・観光資源があり、歩き回るのに楽しい場所になっています。

歴史・文化に関する資源ばかり書いていたため、まちなかにあるエリアと思われるかもしれませんが、周辺には青空と緑がまぶしい江戸川の河川敷が広がっており、サイクリングや散歩も楽しめる健康的な場所になっています。河川敷には都内唯一の渡し場で、江戸時代から続く「矢切の渡し」があり、公共交通機関で移動していると気付かない「東京都の終わり」が実感できます（対岸は千葉県松戸市）。

このような地域資源と上手に調和を取りながら、川甚の新たな歴史のために、私たちがお役に立てるように頑張りたいと思います。

川甚

河川敷

矢切の渡し

豊田市にて「第２期豊田市脱炭素スクール」の運営を支援しています！

有田建哉：
地域産業イノベーショングループ

産業革命以降、経済の成長に伴って地球温暖化も益々進んでいる状況です。

近年はニュースにより、世界の各地で熱波や干ばつ、集中豪雨など様々な自然災害が、人間や地球上の生物に猛威を振るい、それらの生命のリスクを脅かしている様子が頻繁に報道されています。日本でもいたる地域で線状降水帯などの異常気象が生じ、その甚大なる被害を耳にする機会が増えてきました。私たちは地球温暖化について、もう一度考え直す時が来たのかもしれません。

豊田市では、２０５０年ゼロカーボンシティの実現に向けて、豊田市内にある中小企業から参加者を募り、「豊田市脱炭素スクール」を実施しています。このスクールは、豊田市内の産業部門におけるCO_2排出量の削減に繋げることを目的にしており、約1年間を通じて10回の講座を行い、脱炭素経営のポイントや省エネ推進・再エネ導入の実践手法を参加企業に学んでいただくプログラムを組んでいます。講義を通じて世界の脱炭素化における潮流や脱炭素化に取組む重要性を学ぶことはもちろんのこと、実際に自社がどの施設の、どの設備で、どの程度のCO_2を排出しているのかを見える化し、他社と行うグループワークを通じて、意見交換や交流を図りながら脱炭素化について学び合っていただいています。

スクールには既に第1期生及び第2期生を合わせて20社以上の企業に参加していただいています。今年の9月には豊田市脱炭素スクール第2期生が修了し、新たに第3期生の募集がスタートします。

今後益々、世界の企業は、強い経済力と地球に優しい環境への取組の両輪が好循環する企業経営の構築が問われる時代に突入していくと思われます。事務局としては、参加している企業がスクール卒業後も自主的に脱炭素経営を率先して取り組んでいける企業となるように支援させてもらっています。この業務を通じて、自身も環境に対する意識を高く持ち、最後までしっかり業務のお手伝いさせていただきたいと思います。

※この業務には、畑中、中川、植松、江藤も参画しています。

豊田市脱炭素スクールの講義の様子

近況＆イベントのお知らせ

事務所だより

大　阪

「鉄の感覚」

大阪事務所　岩城優香

大阪事務所がある淀屋橋駅周辺には多くのパブリックアートが設置されています。事務所の隣のビルにも作品があり、ひとつは青木野枝「空の粒子／パッセージ」という作品で、サイズや幅の異なる鉄版のリングを組み合わせて形成されています。鉄の集合体なのですが、周りの樹木や植物と融合して有機的な空間がひろがっており、私の中でほっとできる場所です。

もうひとつは、イギリスの彫刻家、アントニー・ゴームリー「アナザー・タイムⅨ」という作品で、自身をかたどった鉄の作品なのですが、台座などに鎮座させず、地下にひっそりとたたずんでおり、初めて視界に入った時は彫刻とは判断できず「ただならぬ気配を出している人がいる！」と、動揺してしまいました。作者は仏教を学んだそうで、作品には東洋思想の影響が見られるそうです。

空の粒子／パッセージ

アナザー・タイムⅨ

この二つの作品は同じ「鉄」という素材でできていますが、全く違う表情をしているところが興味深いです。この他にも付近には多くの作品があり、不意に現れる表現豊かな造形を見ながら歩いていると様々な発見があるので、これからも好奇心を持って探索しながら歩いてみようと思います。

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

54 回　2023 年 5 月 26 日
「ランドスケーピング ～都市と暮らしの景営学～」
講師　大阪公立大学大学院　農学研究科
緑地環境科学専攻　緑地計画学研究室
准教授　武田重昭氏

第 54 回適塾路地奥サロンでは、大阪公立大学大学院の武田重昭氏をお招きし、都市の景観を育てる「ランドスケーピング」についてお話していただきました。

講義で、ランドスケーピングとは、絶えず変わる都市の状況を注意深く読み取り、その都度そこに必要な手入れを考え、積極的に働きかけ続けることで、都市の変化を好ましい方向に導いていく、その丁寧な営みを積み重ねる態度そのものであると教えていただきました。ランドスケーピングの目標は、美しい都市の風景をつくることですが、先生が講義で着目している点は、結果としてできあがる風景ではなく、むしろその美しい都市の風景ができるまでの人間の行動の過程でした。お庭を手入れするガーデニングのように、まちの風景を育てるランドスケーピングという営みができれば、私たちの住んでいるまちも、その暮らしも、共に美しく魅力的になるのではないかという先生のお話に共感しました。

都市も生き物であり、愛情も持って育んでいけば、自ずと美しい都市に育ちます。この講義を聞いて、まずは自分自身が、人も動物も植物も都市もすべてを愛することのできる人間になることが大切なのかもしれないと強く感じました。（有田建哉）

55 回　2023 年 6 月 16 日
「公共空間のデザイン」
講師　株式会社 E-DESIGN
代表取締役　忽那裕樹氏

第 55 回の適塾路地奥サロンでは、株式会社 E-DESIGN の忽那裕樹氏をお招きし、「水と大阪フェス」や「草津川跡地公園」「大阪・関西万博」等を事例に、社会課題の解決に導くデザインの視点についてお話いただきました。

講演では、「つかいこなし」が可能になるデザインを実現するために、大きなビジョンと活動のきっかけづくりを共有し、それらを支える中間支援機能をデザインすることができるかが鍵になることを数々の事例をもとに教えていただきました。中間支援機能をデザインする中で、「この人いけそうだな！」という中間支援機能を引っ張っていけるような人を見つけ、そのような人には、「情報のお得感」を醸し出し、活動の担い手として育ってもらうというお話や、空間をデザインする際には、おせっかいなデザインをせず、「みんながしたいこと」を盛り込んだ環境の器をつくるというお話が印象的であり、誰がつかい、誰のための空間になるのかという地に足のついたことを一つ一つ行っていくことが大切であることを考えることができました。

また講演中、忽那さんの「周りを引き込む力」に圧倒され、この人になら安心して任せられると思わせるプランナーの在り方を模索できる機会にもなりました。（内野絢香）

都市計画コンサルタント協会の新しいビジョンづくりに関わって

坂井信行
東京事務所長

2023 年は都市計画コンサルタント協会が発足して 50 年目、また 2013 年の「新たな時代の都市づくりに向けて－新生都市計画コンサルタント協会のビジョン－」の策定から 10 年が経過するということで、今般、新しい協会ビジョンが策定されました。私も新しいビジョン策定の議論に関わらせていただきました。

新しいビジョンは、「これからの都市計画」「これからの都市計画コンサルタント」「これからの都市計画コンサルタント協会」の 3 部構成になっています。内容の詳細は文末の QR コードからご確認いただくとして、ここでは議論の経過で私が感じたことを記します。まず、コンサルタントという呼び名について、「何をやっている人かわからない」「だまされそう」など、どこかうさん臭さがつきまとい、学生など若い人にとっては「都市プランナー」の方が親しみやすいとの議論がありました。私個人的には上から目線ぽい「プランナー」よりも「コンサルタント」の方がクライアントに寄り添う感じがして好きです。

また、新しいビジョンにも記載がありますが、都市計画が培ってきた技術というものがあります。例えば「…複雑なものを把握し分析する技術」「人々の多様な思いを総合化する技術」といったものです。こうした技術はを持つ人は実は世の中にそれほど多くはなく、またそれは都市計画に関わらず様々な社会問題への対応にも広く役に立つものではないかと思っています。つまり、これからの都市計画コンサルタントは都市計画だけにこだわっているのはもったいない、というのが私の持論です。

今回のビジョンでは一般の方にも読んでいただきやすいよう、ビジュアル版（要旨）も作成されています。ぜひ一度ご覧いただければと思います。

ビジョン本編

ビジョン要旨

景観絵本「八王子まちなか　景観みらいものがたり」が都市景観大賞の優秀賞を受賞しました

水谷省三：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

受賞しました

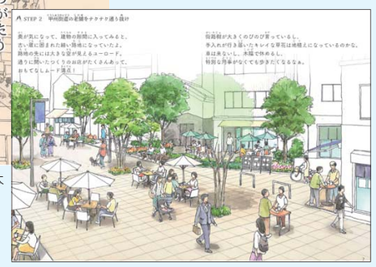
景観絵本は、令和 2 年から検討を始めたもので「八王子駅周辺の未来の景観を考えるワークショップ・景観デザイン会議」の参加者で考えた、八王子まちなかの未来の姿です。八王子の特徴や魅力が気軽に認識できるよう「絵本」という形でまとめられたものです。アルパックは、ワークショップや景観デザイン会議の運営支援、絵本の作成等を支援しました。

都市景観大賞は、良好な景観形成に資する普及啓発活動の一環として、国土交通省が平成 3 年度より実施している表彰制度です。そのなかの「景観まちづくり活動・教育部門」の優秀賞に輝きました。

この景観絵本は、いままでの行政がつくる計画書の枠にとらわれずに、八王子の街なかに興味のある有志で、魅力を再発見し、これからの時代に期待することを議論しながら、実現したらいいなと思えることなど、いまの子ども世代が、大人になる 30 年後の光景（シーン）を描いています。

まちなかをテクテクと歩きながら、ときにはまちを俯瞰しながら、まちの未来をみることができます。シーン毎に「こんな場所で、こんなことができたらいいな」という想いが込められています。

景観絵本



まちの未来のスケッチをワークショップで検討

Letters Arpak
レターズ アルパック
〔レターズアルパック〕240号　2023年7月発行（株）地域計画建築研究所　https://www.arpak.co.jp

まちかど

短夜に妖怪談義とまち歩き

倉見祐子
企画政策推進室

夏の夜の風物詩といえば、妖怪・幽霊・肝試し。ふらふらふら～とまちを散歩していると、案外ばったり出くわすかもしれません。

民俗学の大家・柳田國男は幽霊と妖怪（お化け）を明確に区別していました（今では諸説あるようですが）。それによると、幽霊は見える人を選ぶ（何かしら縁がある人の前に姿を現す）のに対し、お化けは場や時を選ぶが誰にでも見えるそうです。また「お化けは神が零落したもの」とも述べています。それが正しいかはまさに「神のみぞ知る」ですが、それくらい神と妖怪は紙一重だと考えると、八百万の神がおわす日本なら妖怪もまたそこかしこにいて、「会える」存在なのでしょう。

妖怪がよく出現すると言われる時刻は、18時前後の「黄昏時」。昼と夜がまじりあい、向こうから歩いてくる人の顔もよく見えないので「誰そ彼（あなたは誰か?）」と問うことがその名の由来ですが、これは別名「逢魔が時」。妖怪と出くわし、「誰そ彼（あなたはヒトか?妖怪か?）」と問う時刻でもあります。そして出現場所だと「辻（交差点）」が有名。道と道が交差するところは、あの世とこの世が交錯する場所でもあるそうです。「黄昏時の四つ辻」とは交通事故が増える時と場所だと聞くので、そこにはやはり人の感覚を狂わせ、注意を散漫にする〝何か〟がある気がします。

日本では妖怪や鬼のアニメが定期的に流行り、絵本コーナーには常にお化けの本が並んでいて、子ども達はこわがりながらもどこか楽しんでいます。我が家の5歳の息子はなぜか「やまんば」愛が強く（母を重ねている?）、「やまんば」本を読み漁っては倒し方を研究していますが、夜更かしして「やまんばが来るよ!」と言われると即座に布団に入りに行きます。妖怪をこわがりながらも愛着を持ち、受け入れながらも遭遇しないように回避する。それはやはり、妖怪が遠く離れた異界の存在ではなく、すぐ傍にいて生き方やタブー、危険を教えてくれる身近な存在として認識されているからなのでしょう。

そんなことを考えながら、我が家の小さな妖怪ハンターとまちを探検していると、いろんな妖怪を発見してくれます。子どもが語る、ちょっとこわい、ちょっと不思議、でもどこかとぼけた「妖怪」に涼を感じながら、昼間とは違った顔を見せるまちの姿も楽しむことができ、自然と愛着がわいてきます。みなさんも夕涼みを兼ねて、まちの妖怪探しをしてみてはいかがでしょうか。

地獄ボックス：遅くまで公園にいると、鬼から電話がかかってくる。（息子談）

やまんば電車：寝過ごすと、やまんばが出てきて食べられる。逃げるには「ひのかみひのかみ」と唱える。（息子談）

表紙写真：ウズベキスタン・ブハラの路地（撮影　筈谷友紀子）

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。
arpak
アルパック（株）地域計画建築研究所
Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp　E-mail：info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 いちご大手町ノースビル4F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802（株）よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン（ベトナム）	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward,District1, Ho Chi Minh City, Vietnam		

再エネ100宣言 RE Action
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。